

# 雜感「浄土の教言」

廣 瀬 杲

法然によって果し遂げられた「浄土宗」独立のもつ意義は、観念化の介在を寸分も許さない大乘の仏教、すなわち絶対なる仏乗の開示であり建立である、というところにあると言えよう。そのことは、一代仏教を聖道門と浄土門との二つに分判して、「聖道・浄土の二門を立つる意は、聖道を捨てて浄土門に入らしめんが為なり」(『選択集』・教相章)と言いつけることによっても明らかである。しかし何故に、聖道門として立てられた仏教が廃捨されねばならないのであろうか。立ててしかも廃捨されるという、その必然の道理はどこにあるのであろうか。そのことについて、法然は

凡そ此の聖道門の大意は、大乘および小乗を論ぜず。此の娑婆世界の中に於て、四乗の道を修して四乗の果を得。四乗というは、三乗の外に仏乗を加うるなり(同右)

と、大胆な断定を行なっている。すなわち、大乘・小乗という、仏教における最も初発的な分判の底に、変ることなく保持され続けている質としての同一性を見究めることを以て、そうした分判の質を問うことのないままに、そのうえに立てられ続けて来た聖道仏教の教相判釈が、人間の歴史のうえに仏道としての普遍性を顕示し得なかつたという

事実を明らかにしたのである。そして、そうした質を「此の娑婆世界の中に於て、四乗の道を修して四乗の果を得」  
ようにするという、その一点において決するのである。換言すれば、人間内的な関心における修学を以て、人間である  
ことの課題を超越しようとし、超越し得ると考ええるという、自己なる存在への根本的無明性として、その質を決定  
するのであり、無明において無明存在を超越しようとする、決定的な無明性を、そこに見据えているのである。その  
ことは、証空が『選択要決』の「巻第一」において

今、浄土宗と言うは、娑婆宗に対して浄土宗と云う。之に依つて宗義に最も其の替り有り。謂く聖道自力の娑婆  
宗を以ては自力宗と云う

と、明瞭に示しているごとくである。しかし法然にあっては、こううした聖道仏教の質の見定めにおいても、徹底し  
て現実的であることが思われる。すなわち、声聞乘・縁覚乘・菩薩乗と呼ばれる三乗教にあっては、向上性のうえに  
修せられる学道の歩みそのものが、おのづからに、自らの修学の質をなしている無明性に気付かしめる縁を、なお保  
持していると言えようが、「三乗の外に仏乗を加うるなり」と述べる「仏乗」にあっては、そのような修学そのもの  
までも観念化して、ただ戯論のうちに仏道としての現実態を解体し尽くしてしまうという、決定的な非仏教化が行なわ  
れるというのである。そして、このように非仏道であるが故に、精緻を極め得る教理仏教が、自らを仏乗と名乗り誇  
示することにおいて、大乘なる仏道の現成を障碍する、と見究めるのである。

まさに、大乘なる仏道の現成を障碍するもの、それが、仏乗であることを誇示する聖道の仏教であるという現実態  
を、非妥協的に見据えつつ、人間内的な関心によるいかなる教道からも無縁でしかない今日を生きる無告の大衆の、  
絶望的慟哭を聞きとることにおいて、そこに、真に大乘なる仏教、一乗なる仏道の成就さるべき必然の場を、はつき  
りと見定めたのが法然であった。人間内的な関心事として人間にかかわるものである限り、そこには、人間を救済す

る必然性があり得ない。必然性なくして仏教の大乗性を主張するならば、それは虚偽である。しかも、このような事実は、決して情況的なこととしてのみ、そうであるのではなく、いかなる情況の下においても、この事実は変ることではないという、一切の夢想を払い切った人間凝視において、聖道仏教と訣別し、浄土宗を建立した人、それが、法然である。従って、聖道・浄土二門の廃立とは、仏教における二つの在り方を相対化して、その一つから他の一つへ移行することではない。仏教の質を歴史の現実のただ中において問い直し、そこに、仏道と非仏道とを決着づける変革であり、それ故に、大乘なる仏道の独立であり開示なのである。この事実に立って、親鸞は「大乘のなかの至極なり」(末燈鈔)と頷いたのである。

しからば、こうした意味において、「浄土宗」と名乗る仏教とは、どのようなものなのであろうか。法然は

正しく往生浄土を明すの教というは、三経一論是なり。三経というは、一には無量寿経、二には観無量寿経、三には阿弥陀経なり。一論というは、天親の往生論是なり。或は此の三経を指して浄土の三部経と号すなり(『選択集』・教相章)

と、端的に明示する。すなわち法然が「浄土宗」として開示した仏道とは、まさしく、浄土の三経と浄土の一論の仏事に外ならない。しかし、このことは既に遠く曇鸞によって

無量寿は是れ安樂浄土の如来の別号なり。釈迦牟尼仏王舎城及び舎衛国にましまして、大衆の中に於て、無量寿仏の莊嚴功徳を説きたまへり。即ち仏の名号を以て経の体と爲す。後の聖者婆伽槃頭菩薩、如来大悲の教を服膺して、経に傍えて願生の偈を作れり。また長行を造りて重ねて梵言を訳す(『浄土論註』・上巻)

と、指教されていたことであった。しかし、そのことを、宗となる仏教、人間を平等に、そして、具体的に救済する大乘の仏道として開示したのは法然である。

三經一論の仏事、それは、「娑婆宗」としての人間内的行事ではなく、娑婆を自己とする人間をして、その宗を平等に浄土なる如来の力用に仰がしめる仏の行事である。そのような仏事を、阿弥陀の本願とその成就、と呼ぶのであろう。すなわち、阿弥陀の本願の仏教、それが「浄土の三部経」であり、その成就を生きる新しき人間の表白、それが「天親の往生論」なのである。そのことを一言にして言い切るならば、人間をして往生人たらしむる仏事である。それ故に、往生人たらしめられた存在にとって、大乘の仏教とは、阿弥陀如来の本願の教え以外にはないのである。このように見てくるとき、親鸞が「浄土の三部経」を

斯の三経は則ち大聖の自説なり（『教行信証』・化身土巻）  
と確かめ、その内実を

三経の真実は選択本願を宗と為すなり。また三経の方便は、即ち是れ諸の善根を修するを要と為るなり（同右）と示されたことの意味深さを思う。真実が、「諸の善根を修する」ことを以て善なる生き方とする人間の意識的行為を、そのままに方便とする。いかなることの為の方便であるかといえは、まさしくそうした人間の意識的行為の無根拠性への覚醒をうながさんが為である。すなわち、人間としての作善意欲を方便とすることによって、人間であることを十全に知らしめる真実の力用は、阿弥陀如来の本願の外にはあり得ないのである。人間を方便として人間を明らかにする真実、それが、阿弥陀の選択本願である。こうした具体的事実を、人間における歴史の現実のただ中に、つねに今日の事として証する「浄土宗」なる大乘の仏事を、親鸞はまた

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真というは、選択本願なり。仮というは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乘のなかの至極なり（『未燈鈔』）

と確かめるとともに、その「大乘のなかの至極」なる「浄土真宗」を

門余と言うは、門は即ち八万四千の仮門なり。余は則ち本願一乘海なり『教行信証』・化身土巻

として、明確に位置付けている。唯仏一道のみが人間の成仏を必然せしめるものである。そして、それ以外のいかなる人間関心的なことへの介入も拒絶し尽される。しかし、そのことは決して人間を拒否することではなく、人間であることのすべてを過不足なく包み取って自体とする。このような阿弥陀如来の本願の力用である浄土真宗は

信に知ぬ。聖道の諸教は、在世正法の為にして、全く像末法滅の時機に非ず、已に時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は、在世正法像末法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したもうをや（同右）

と、ふかぶかとした讃嘆をもって頷かれるものである。親鸞は「時機」という言葉について、「時と衆生」（『正像末和讃』・初稿本・左訓）という確かめをしている。そこには觀念化することを許さない、人間の生の事実への頷きが示されている。衆生として時を生ぎること、それが、人間の生の事実である。その限り、こうした人間の生の事実に乖離するものであるならば、人間の全き救済を約束する資格は皆無と言わざるを得ない。ただ、そのような人間の生の事実を無条件に摂して、しかも、それを転じて救済の内実とする。ここに「真実方便の願」（『教行信証』・化身土巻）に応じて「方便真実の教を顕彰する」（同右）「浄土の三部経」が、大乘至極の經典としての位置を、確実に保持する必然性がある。とするならば、その「浄土の三部経」に、いま、われわれは、どのような具体性を以て、大悲の教言を聞くことができるのであろうか。

まさに諦聴し善く思念すべき秋である。